

氏名(本籍地)	萩原 孝恵(群馬県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第63号		
学位授与年月日	平成21年9月30日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	「だから」の語用論 ーテキスト構成的機能から対人関係的機能へー		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	徳永 美暁
	(副査)	昭和女子大学特任教授	池上 嘉彦
		昭和女子大学特任教授	中田 清一
		青山学院大学大学院国際政治経済学研究科	
		教授	田辺 正美

論文審査結果の要旨

接続詞には、前件と後件の論理関係を明示する役割があるが、話し言葉では、必ずしも論理的とは言えない使われ方がみられる。本論文は、接続詞「だから」が接続詞本来の「論理的」な機能が背景化され、話し手の〈主観的〉な意図や態度というものが前面に押し出される使われ方が少なくないという理由で、「だから」の語用論的機能を緻密に分析し体系化した労作である。

接続詞「だから」が、例えば「昨夜は徹夜をした。だから、今日は眠い」というような、前件と後件の論理関係が順接であることを示すだけであれば、日本語を外国語として学ぶ学習者にとって何も問題はない。しかし、実際の自然発話では、順接の意味で使用されることより、会話者間の人間関係や状況によって、異なる機能を果たす語として使用されることのほうが多い。例えば、上司から「会議は何時だったかね？」と何度も聞かれ、部下が念を押す意味で「だから、会議は3時です」と言った場合、上司は不快に思うであろう。それは、部下の「だから」の使用によって「何度も申し上げているように」というような部下の主張が強く押し出されるからである。しかし、この発話が、上司から部下になされた場合であれば、「だから」の使用は適切である。このように話し言葉での「だから」の使用は、誰が誰に使用するかによって、その適格性が異なることも多い。また、発話が終わっていないのに「・・・だから」と発話を終了させ、相手に自分の真意を察してほしいという「甘え」の機能をもつこともあり、その語用論的機能は多様である。

言語が人間の世界についての認知や捉え方の表出であることを踏まえて、これらの多様な「だから」の語用を解明するために、まず執筆者は詳細に多くの先行研究に当たり、未

だ説得力のある客観的な分析を提示している文献はないということを検証している。そして、接続詞というものの性質や機能について、結束性や指示などの論理関係を示す「テキスト構成的機能」が基本であるものの、会話においては主観性の表出である「対人関係的機能」を有するという多面的なアプローチで分析・考察している。

まず、基礎調査として話し言葉に表れる接続詞の量的研究の先行研究の検証を行い、その有用性を示している。更に、コーパスを利用し「論文指導時の教員と学生の会話」と「学生同士の会話」に表れる接続詞を洗い出し、その種類と頻度を調べている。その上で、〈タテ〉の人間関係と〈ヨコ〉の人間関係での会話に表れる「だから」の語用論的機能の違いを分析している。また、〈ウチ〉と〈ソト〉のような親疎関係という人間関係においては、共有知識も多く、また前提を共有している場合も多いため、前件が言語によって提示されることもなく、また過去の出来事が照応先である場合でも「だから」で後件だけを述べるのが可能であるということも検証している。また、「だから」が文頭・文中・文末に表れる場合の機能の違い、終助詞を伴う場合の「だから」の機能、イントネーションの違いによる機能の違い、など様々な視点から分析・考察を丁寧に行っている。その結果、「だから」が接続詞としてより、話者の「主張」や、その反対の「甘え」などの心的距離を指標とする〈主観性〉に基づいて使い分けられていることを実証している。

夥しい分野に散見される文献を丁寧に検証し、多くのデータを分析の対象とし、「だから」の語用論的機能を詳細に考察し提示した本論文は、従来の接続詞研究では蔑ろにされてきた接続詞使用の人間関係の面と会話の活動領域といった因子に着眼し、「だから」の運用ルールを明示化することを試み、また、この表現の使用が「テキスト構成的機能」から「対人関係的機能」に拡張されていることを実証した重要な研究で、日本語の語用論研究に貢献すると判断できる。